混沌から秩序へ

井　本　英　一

エジプトの都市メンピスの主神オシリスは，アピス（ギリシア語名エパポス）と呼ばれる牡牛で表象された。エジプト人１人ひとりには特定のトーテム動物がいたが，アピス牛はエジプト人全体のトーテムとされた。ヘロドトス『歴史』によると，天上から光が牝牛に降り，アピスを生む。母牛は，１度出産したあとは，２度と受胎することはない。聖牛アピスは特別な目印をつけている。黒牛であるが眉間に四角い白い斑点があり，背には鷲の形をした文様がある。尾の毛は白黒２つに岐れ，舌の裏に甲虫の形をした肉の塊がついている（3.28)。聖牛アピスは年に１度供犠された。牛を祭壇に曳いてゆき，その首を刎ね，首に呪詛を投げかけたあと，市場のギリシア商人に売る。ギリシア商人のいない場合は，首をナイル川に捨てる。その首に，個人あるいはエジプト全体の災いが転ずるように祈る。エジプトでは，牛以外の動物でも，その首を食用にする者が１人もいないのはこの風習からきている（2.39)。

冥界の王であるオシリスは，その妻であるイシスと共に古代エジプト人に崇拝された。イシスは，オシリスの妻であり姉妹であると同時に，母であり娘でもあった。日本でも古くから神話・伝説で語られてきた母子神がこれに相当する。父王を殺して実母を妻とし，父の王国を継いだオイディプスはギリシア神話における母子神の伝承にもとづいている。オシリスはエジプト王

の祖先でもあり，エジプト人全体の祖先でもあった。オシリスは地上ではアピス牛で表象された。アピスはエジプト，エジプト人のトーテムであった。この牛は，冥界である天から降ってきた聖なる霊に感じた牝牛が生んだ仔牛である。ヘロドトスが伝えるバビロンその他の古代都市で行われたイシュタル女神（イシス，キュベレ，ヴィーナス，アナーヒターなどの女神がこれに相当する）の神殿での１夜かぎりの聖婚は，聖牛誕生の理解に役立つ。

バビロンの女は，一生に１度はアフロディテ（イシュタル）の神殿に座って，見知らぬ男と１夜を共にしなければならなかった（１.199)。春分の日，この神殿に参詣する男はイシュタル女神の夫であり子であるタンムズ神とされた。そこで受胎した女は，40週あとの冬至前後に神の子を生んだ。イエスの誕生もこのような環境で生まれた神の子の伝統にもとづく。ローマカトリックでは，３月25日を受胎告知日とし，12月25日をイエスの誕生日とする。神殿の外では，聖なる仔牛を手に入れるため，牛の聖婚を行った。牛の在胎期間は285日であるので，冬至前後に神の子である聖牛を生んだ。聖牛アピスはエジプト国のトーテムであり守護神であるばかりでなく，エジプト人１人ひとりの他我（アルテル・エゴ）でもあった。

聖牛アピスは黒毛で白色の文様をつけていた。黒色はあの世の存在を示す色であった。この世を象徴する白色を交えることによってこの牛は境界を表象した。そこで，アピスは死と再生の儀礼に用いられた。アピスの背に鷲の形の文様があったという。舌の裏側には，エジプト人が聖虫とした甲虫スカラベの形をした肉塊がついていた。主体である牛は獣類で，鷲は鳥類である。スカラベ（フンコロガシ）は虫類であるが，エジプトの分類では地下と地上と空中を往復する存在であったと考えられる。スカラベは太陽神である一方，スカラベ型の石製の護符は，ミイラの胸の上に置かれた。鳥獣虫の複合は，トーテムであるアピスの中に，エジプト人の魂が輪廻する生き物が同居することを表わしている。

ヘロドトスは，エジプト人の考えでは，人間の魂は不滅で，肉体が亡びたあとも，順々に陸に棲むもの，海に棲むもの，空飛ぶものの中に入り，3000

年かけて全ての生き物を一巡し，ふたたび生まれてくる人間の体内に入ると述べている（2.123)。エジプト人は，トーテムの舌の裏に甲虫を入れた。トーテムの国に行くミイラは胸の上にスカラベの護符を置いたが，ミイラ自身も自らの舌の裏に何か肉塊にあたるものを入れたであろう。中国人は，蟬の形に彫った玉を死者の舌の裏に入れてやった。エジプト人の甲虫も中国人の蟬も地下の生活があるとされた。聖牛アピスは，死せるオシリスで冥界の王であると同時に，復活するオシリスであった。ヘロドトスによると，聖牛アピスが出現すると，エジプト人は晴れ着を身につけて祝宴を催した（3.27)。死せるオシリスがこの世に再生したことを祝ったのである。オシリスは，地下に戻った殻霊ともされた。地上に芽生えて成長して実を結び，人間に刈り取られて人間を養い，自ら地下に戻ってオシリスになった。

アピスは年に1度，オシリスに供犠された。オシリスは宇宙の盛衰と連動していると考えられた。一年の末期には，オシリスはもっとも衰弱すると考えられた。死者の世界の王が衰弱して死ぬというのは論理的にはおかしな話であるが，死者の世界は生者の世界と表裏一体をなしているので，いずれも生命体の世界である。アピスはオシリスの他我であるので，他我を殺すことによって，他我の魂をその本体に移したのである。他我であるアピスは，その身体に鳥と虫の形象を具えた輪廻転生完成型の存在である。この存在から，魂が死せるオシリスに移るのである。

供犠するとき，人びとはアピスの首を斬り，それに呪詛を浴びせた。呪詛と祝福は，死と生，あの世とこの世のような別々の状態にあるものに向かって発せられる通告であったと思う。呪詛はこの世からあの世に移動する者に対して発せられる通告で，祝福はあの世からこの世に移動する者に対して通告することであった。聖牛アピスの首をあの世に送るときは，イエス・キリストをあの世に送るとき，罵詈雑言を浴びせたのと同じように，あの世に入る者に対する祝福であり祈りであった。この儀式を済ませてギリシア人の肉屋に売った。ギリシア人は，エジプト人にとっては，あらゆるものが逆さまの存在であった。つまり異境の人間であった。供犠されてあの世に送られた

アピスは，聖なる穢れであった。古くは，儀礼のあと，エジプト人はギリシア人が捌いた聖牛の肉を再生したオシリスと共食した。聖牛の肉を異界の人であるギリシア人商人から買い，調理して食べた。呪詛を浴びた首の処理について，ヘロドトスは何も語らないが，それはギリシア人の肉屋の看板として，店頭に安置されたであろう。中国の故事に，羊頭を掲げて狗肉を売るというのがある。現在でも，世界の多くの地方で，肉屋は扱う動物の首を店頭に置いて看板にする。

異界の人であるギリシア人がいない場合は，首をナイル川に投じたという。こうすることによって，首を冥界に運んでもらったのである。この場合も，首に呪詛のことばを浴びせ，エジプト全体の罪穢れが首に移るよう祈った。市はエジプト人の他に，ギリシア人，リビア人，ヌビア人などの諸民族が交易を行う場所であった。ギリシア人は，エジプト人のすることが全てあべこべであると考えていた。このことは，ヘロドトスがその『歴史』の中で明言しているとおりである（2．35)。ここで，ヘロドトスは，エジプトの女は市場に出て商いをするのに，男は家にいて機織りをする，といっている。その他，機織りの方法，男女の荷物の運び方，男女の小便の仕方，屋内ではなく屋外の路上での食事，男性だけが務める聖職について論じている。

聖牛アピスは白斑のある黒牛であるので，エジプトで現在目に入る飴色の牛とはちがい珍しいものである。しかし，エジプトの南にあるスーダンでは，白黒まだらの牛はふつうに見られる。黒と白のまだらは死と生を象徴していて，アピスがある一定の時季に供犠されたことを物語る。穀霊の死からの再生を祝う儀礼であったと考えられるので，恵みの雨を待ったにちがいない。ヘロドトスは，ギリシア人の商人が市にいるときは，祭りで殺したアピス牛は彼らが扱ったといっている。聖牛アピスは異界の人であるギリシア人が扱ったので，エジプト人は手を触れることはできなかった。おそらく，時代が新しくなると，古代エジプト人は，聖牛アピスの肉を口にすることもなくなったであろう。この種の牛は極東にも見られ，明治天皇や大正天皇の大葬のとき，霊柩車を曳く牛として用いられた。これに関しては，チェンバレン『日

本事物誌』（東洋文庫）の事例を引いて，かつて論じたことがある。

死と再生の儀礼に用いられる牛は，穀霊の再生儀礼にも用いられた。穀霊の再生は降雨から始まった。エジプトでは，ギリシア商人がいないときは，呪詛で汚された聖牛アピスの首はナイル川に投じられた。川に流すのは，牛の首をあの世に送ることであった。エジプトの場合，異界であるギリシアは河口の遙か向こうにあるので，理屈に合う。古典ギリシア以前のエーゲ海文明のギリシアについても同断である。ギリシア人商人が市場にいる場合については，切り落とした牛の首はナイル川に投入する記述はなく，ギリシア人に売り渡すとある。呪詛された牛の首がナイル川を経ないで直接ギリシア人の手に渡った場合，それで全てが終結した観がある。終結したのではなく，エジプト人は市場で牛の首を購い，改めて首をナイル川に投じたと考えられる。

イスラム教徒の出産はユダヤ教徒の産婆が手助けをするが，古くはそこには聖性の処理の問題があった。儀礼的な入浴を行う場合，イラン人の女性はユダヤ人が経営する浴場を利用した。葬儀のときとそのあとの清めで使用する墓地の近くにある浴場の経営者も，イスラム圏では非イスラム教徒であろう。アフリカのソマリアのイスラム教徒遊牧民出身のトップモデルであり，国連特別大使でもあるワリス・ディリーの回想によると，女性の割礼を実施するのは，彼らがジプシーのおばさんと呼ぶ女である。彼女が女性の陰核と大小陰唇を切除し，小さい２つの穴を残して縫合する（ワリス・ディリー『砂漠の女ディリー』草思社，1999年，60頁他）。割礼の聖性にたずさわる者は非イスラム教徒でなければならない。女性性器切除はアフリカ大陸28か国で広く行われ，毎年200万人の女性が犠牲になっている。１日平均6000人ということになる（前掲書，319頁）。革命前，イランの首都テヘランのバザール（市場）で，媚薬と称して，乾燥させたアフリカ産のトカゲや，真偽の程は定かでないが，鶏のとさかと呼ばれる切除物が売られていた。

イスラム教徒とユダヤ教徒，ジプシーとソマリア人，ギリシア人とエジプト人，イラン人とアフリカ人の間には，死体処理，出産，食物さらには外科

手術，教育などの宗教儀礼上の穢れが存在するため，相互にその穢れが再生のための活力になるのである。宗教的差別や人種的差別とは別の穢れ観に立っている。

『日本書紀』によると，皇極天皇元年の気候は不順であった。3月3日，雲もないのに雨が降った。この月，長雨がつづいた。4月も長雨があった。6月16日小雨が降ったが，この月は大変な日照りだった。7月9日，客星（まろうどぼし）が月に入った。25日，群臣が語り合っていった。村々の神官（はふりびととという犠牲獣の屠殺者）が教えるとおりに，あるいは牛馬を殺して諸社の神を祭り，あるいは市場を移動させ，あるいは川の神に祈ったが何の効き目もなかった，と。蘇我入鹿は，寺々で大雲経を転読し，悔過して雨乞いしようといった。27日，百済大寺の南庭で大雲経を読ませた。28日，小雨が降った。8月1日，天皇が南淵の川上で跪き，四方を拝すると雷が鳴り，5日間にわたって大雨が降り，天下がうるおった。

雨乞いには牛だけでなく馬も殺した。2週間あまり前，星が月の中に入ったとある。これは凶兆で，結果的にいえば，旱魃の前兆であった。舒明天皇崩御の1年前，星が月に入った。これも結果的に見れば凶兆であった。皇極天皇の雨乞いには，牛馬の屠殺，市場，川のモチーフが出る。ヘロドトスが伝える聖牛アピスの行事では，牛の屠殺，市場，川のモチーフが出る。ヘロドトスには記述はないが，アピス牛の供犠は雨乞いのためであったことは間違いなさそうである。

「皇極天皇紀」には，雨乞いのために頻（しきり）に市を移したが，全く効果がなかったとある。市は古くは固定した店舗が集まったものではなく，アジア・アフリカで普通に見られる青空市場のようなものであった。日本の寺社の縁日や祭日に，参道や境内に出る露店も青空市場の一種である。のちに露店は固定店舗に発展する。発生的には，寺社の周りに参詣人目当てに露店が集まるのでなく，この世とあの世の境界に，多種の人々が物々交換のために集まり，市神を祭ったのが露店の起源であった。市場は固定したものでなく，都合によってその場所を移すことが容易であった。文明が発達した都市でも，

午前は右京で，午後は左京でといったような市の移動が行われた。増尾伸一郎「農耕神事から歌舞遊宴へ」(『えとのす』，28号，新日本教育図書，1985年）にいう。市は交易だけでなく，ときに邪霊祓除，処刑，祈雨，誄や殯宮儀礼などの場としても機能した。市はどの共同体にも属さない，日常の生活領域とは異なった空間として認識されていた。歌垣が行われた理由も，単に多数の人が集まったことによるものではなく，市がこうした性格をもっていたからに外ならない（53頁)。市は境界であった。

雨あがりの空の太陽と反対側に，光学的作用によって虹が生じる。虹の描く弧は，この世とあの世の境界に架った橋と考えられた。現実の世界では，川に架った橋の両側のたもとに定期市が立つ。これは，この観念によるものであろう。ナイル川は毎日のように，太陽が高くなるまで川面は水蒸気に覆われている。古くから，生きた人間の世界であったナイルの右岸に立ったとき，虹が見られた。場所によっては，弧の一方は右岸に，他の一方は死者の国に足をつけていた。ヘロドトスはその『歴史』の中で，エジプトの土壌はナイルがエチオピアから運んできた沖積土から成っているので，黒色で脆い。リビアの土はむしろ赤味を帯びた砂質であり，シリアでは土が粘土質で石が多い，といっている（2.12)。

ナイル川左岸は，古くからサハラ砂漠，リビア砂漠の細かい砂が西方から吹き寄せて死の世界を形成してきた。ヘロドトスは前掲の個所で，山中に貝類が見られ，地上に塩が吹き出て，そのためにピラミッドが腐蝕を受けるほどであるといっている。サハラというのはアラビア語で，黄色味を帯びた茶色を意味する。モロッコのカサブランカは，字義どおり建物の壁や土塀全てが白を用いるよう法律で定められている。サハラの縁辺部にあるマラケシュは，これに対して街じゅうが赤で統一されている。砂漠は素焼きの植木鉢を砕いて細粉にしたような砂が平原状あるいは丘陵状をなして延々とつづく。砂漠からは大小のアンモン貝や三葉虫などの化石が無数に出てくる。アンモンというのは古代エジプトの主神で，アレクサンダー大王はアンモン神の子といわれた。砂の中からローズ・ド・サハラという，バラの花を盛り上げた

ような塩の結晶が出てくる。サハラのバラはサハラの象徴であるので，世界中のモロッコ料理店にはこの名がついたものが多い。東京の新宿にあるモロッコ料理店にもこの名がついており，ベルベル人（トワレグ族）が経営している。

李王朝の雨乞いは高麗王朝の制度をならったものである。林鐘国『ソウル城下に漢江は流れる』（朴海錫，姜徳相訳，平凡社，1987年）にいう。漢江上流の島では，虎の頭の張子をつくって，滝と船着き場に投げ入れる。第3代王太宗が建立した昌徳宮の後苑その他3か所の池では，数十人の青衣（しょうえ）を着た童子が蜥蜴（とかげ）を捕えて水瓶に入れ，柳の枝で瓶を打ち，蜥蜴よ，蜥蜴よ，雨を降らせば解放してやる，と大声で叫ぶ。この行事は宮廷行事として3日間行われ，市場は移され，南門を閉じて北門を開ける。旱魃がひどくなると，国王は官員の成績考課を避け，食事も控え目にし，太鼓を打つのを止め，無実の囚人を解放した。虎の頭を水中に投ずるのは，竜と虎を闘わせて雨を降らせようという意味である（200－202頁）。

朝鮮では牛馬の首ではなく，すでに数が少くなった虎の頭の張り子を使った。朝鮮では竜虎が闘って雨を降らせると考えられた。竜は蜥蜴で表象された。竜王は雨を司ったので，朝鮮の代表である虎は恰好の動物である。南大門は閉じられ，3日間は北大門で市場が開かれた。雨乞いに際しては，無実の囚人を解放した。恐らく，軽い罪の囚人も赦免されたであろう。この3日間は，危機であった。死と再生の境界であった。一切のことが停止されるか，控え目にされた。この3日間は，新年を迎える直前の閏日や，王の即位直前の閏日と同じものであった。青衣（しょうえ）を着た童子が蜥蜴を打ったという。青衣は東大寺二月堂のお水取りが行われる3月5日の実忠忌の夜，集慶という僧が過去帳を読んでいたときに現れた女人（にょにん）が身につけていたものである。過去帳は，実忠忌の5日とお水取りの12日の夜にだけ読み上げる。この2日は，死と再生を象徴する日で，死の日に青衣の女人が現れたのである。青衣はただの屍衣ではなく，再生を前提とし衣服である。現在の中国でも，死者に着せる屍衣は伝統的な濃紺である。濃紺は一方では死の色であるが，一方では

再生の色である。青衣は死と再生の境界に出現する色である。世界的に見て，男性のもっとも儀式的な洋服の色は濃紺であるが，この伝統と関係があると思う。青衣の童子が蜥蜴を打ったのは，竜を賦活するためであった。願いごとを叶えてくれないなら，叶えてくれるまで打ちつづけるぞ，という意味ではなかった。

雨乞いは年の変わり目，即位の直前，つまり再生直前の儀礼であった。実際には，古い夏至正月の前に行われた儀礼が，新年が移行したあとも伝統的に行われてきた。朝鮮には太宗雨という伝承がある。邊恩田「踏橋（タリパルキ）——朝鮮の王権と橋の芸能」にいう。朝鮮第3代王太宗（在位1401－1418）は，『太宗実録』によると，即位する前に，あかつきどき，椽（たるき）ほどの大きさの白竜を寝室の上に見た。太宗が建てた昌徳宮で雨乞いが行われたことは前述したが，この宮殿は臥竜洞と呼ばれる地に建てられた。洪錫謨『東国歳時記』（姜在彦訳，東洋文庫，1971，110頁）によると，5月10日は太宗が崩じた日で，この祭日には毎年必ず雨が降る。これを太宗雨という。太宗が臨終のとき，世宗（在位1419－1450）に教えていった。旱魃が甚しい。自分が死んで，もし霊魂があるならば，必ずこの日に雨を降らすだろう，と。のちに果たしてそのようになった（65－66頁）。

朝鮮では雨乞いのことを祈雨祭といい，三国時代から朝廷や地方官庁で天を祭る祈雨祭が行われた。このとき，罪人の特赦や市場の移転が行われた。民間では村ごとに定められた山頂で山神に対する祭壇を設けて，豚の頭，酒，五穀，果実，蔬菜などを供えて村の長が祭官となって山神祭を行うが，巫女が司る場合もある。村人が薪をもち寄って山頂で燃やす。竜が棲むという沼や淵の岸に祭壇を設け，豚の頭を水中に投入する方式もある。風水説に従った，主峰を頂点とし，東西の峰に囲まれ，南が開けた場所は明堂といわれる墓地で，ここに密葬が行われると，麓の村々に干害が及ぶとされる。そこで，このような密葬地を探し出して墓を暴けば雨が降ると信じる女性たちと被葬者の遺族の間で紛争が発生することもある（伊藤亜人他監修『朝鮮を知る事典』「雨乞い」伊藤亜人執筆，平凡社，1986年，4頁）。

朝鮮の歴史・民俗を一望でき，かつ理解できる一級資料といわれる今村鞆『歴史・民俗　朝鮮漫談』（南山吟社，1928年，国書刊行会復刻，1995年）に雨乞い９項があるので要約しておこう。『李朝実録』を見れば分かるが，朝鮮には３～４年に１度は旱害があった。そこで，雨の多い年は水稲になり，旱天のつづく年は陸稲になる稲が自然にできたという。三国時代以来，旱天に対する方法は種々講じられたが，代表的なものを挙げてみよう。(1)山川海風雷ばかりでなく，風雲雷，社稷，城埠，宗廟，宮門，城門を祭って鬼神に雨を祈った。(2)囚人を解放し，無実で刑死したものを追悼した。そうしないと，無実の者の気が凝結して旱りをなすと考えられた。(3)宮女に数日間，外出の自由を与えた。宮中に閉じ籠められた女たちは男旱りをもよおしているので，その悶々の情が凝って旱りにならないようにするためであった。(4)旱りのときは南門を閉じ，東小門を開いた。(5)旱りのときは，軍役についている農民を数を限って解放した。(6)その理由は分からないが，地上に曝されている人骨を，その霊を慰めるために埋めたり，まじないのために埋めた。ときどき，朝廷がやった。(7)虎の頭を漢江や滝壷に沈めた。そこにいる竜を怒らせたため，雨が降ると考えたようである。その他，山上で火を焚く方法も行われた（439－441頁）。

５月10日の雨乞いは，李朝の太宗の故事になっているが，モンゴルでもこの日は雨乞いの日である。この国では旧暦５月13日にオボ祭が行われる。1984年６月22日の読売新聞によると，この年は６月12日にあたり，高原の丘陵上の境界と考えられる地につくられたオボで雨乞いの儀礼が行われ，羊の頭，羊の四肢，肋骨，尾の４つの部分を供えた。朝鮮の太宗雨は５月10日であるが，３日間つづくので５月13日も祭日である。モンゴルのオボ祭と雨乞いは，朝鮮の太宗雨とは関係のないものであるが，雨乞いと祖先祭りの点は共通している。いずれも，夏至を迎える直前の祭りであった。囚人を解放したり，宮女を解放したりするのは，幽閉された者を解放する行為で，新年祭や即位式の前には，古代世界では普通に見られる現象であった。死と再生の儀礼では，幽閉は死や混沌と同一視され，解放されて再生と秩序の世界に入

ると考えられた。

都門の一つを閉じ，他を開けることは，当然のことであるが，門外で開かれる市場に影響を与えた。この場合も，混沌から秩序への移行があった。時代が遡れば遡るほど，門前市には露店が多いので，移動は容易であった。露店商は自分の店を新たに出して，秩序に入ったのである。イラン東北部のホラサン地方では，旱りがつづくと，子供たちが集団になって行進し，棒の先にロバの首を固定して家々を回っていう。ロバの首を焼く薪を頂戴，と。このようにして多くの薪を集め，山の上でロバの首を焼く。そうすると雨が降ってくる（A・J・ハーンサーリー，サーデク・ヘダーヤト『ペルシア民俗誌』岡田恵美子，奥西峻介訳，東洋文庫，1999年，324頁)。朝鮮では，村人が薪をもち寄って山上で豚の首を焼く。イスラム教国のイランでは，宗教的な穢れが強い豚を用いないで，ロバを用いる。朝鮮では豚は古くから聖獣であった。

朝鮮の雨乞いの風俗には，西アジアのそれと似たものがある。雨乞いには死者の骨が用いられた。朝鮮では明堂に密葬された死体を暴いたり，地上に曝された白骨を埋葬することによって雨乞いをした。中国では，仇敵の遺骸を墓から掘り出し，遺骸に鞭打ったり，処刑台から下した刑死者の屍体を打ったりしたが，死者がもっている力をわが身につける意味があった（井本英一『習俗の始原をたずねて』法政大学出版局，1992年，125頁他)。このような行事は新しい支配者の即位のときに行われた。それは季節の変わり目にあたっていて，天神を祭り雨乞いをするときでもあった。

ダビデ王の治世に3年つづいて饑饉があった。ダビデは主に託宣を求めた。主はいった。非ヘブライ人でアモリ人の生き残りであるギベオン人を殺害したサウル王と一族に責任がある，と。ダビデはギベオン人にどうすればよいのか相談した。ギベオン人は答えた。我われを滅亡させようとしたサウル王の子孫の中から7人を我われに渡して下さい。主の御前で彼らを曝したい，と。ダビデは7人のサウルの子と孫を捕えてギベオン人に渡した。7人は山上で一度に処刑されたが，それは大麦の刈り入れどきであった。サウルのめ

かけであったリッパは，雨が降るまで2人の王子の屍体を昼夜となく鳥と野獣から守った。ダビデはサウルの骨とその子ヨナタンの骨を運んできた。これらの骨は，サウルがペリシテ人に討たれたとき，曝されていたものであった。ダビデはこれらの骨と曝された7人の骨を集め，サウルの父キシュの墓に葬った。神はこの国のため，祈りに応えた（「サムエル記」下21．1－14)。

これはダビデの王朝によって行われた雨乞いである。先王とその王子らの骨を，曝された場所から別の場所，ここではサウル王の父の墓に移すことにより，神に嘉せられ，3年振りに雨が降った。骨を移す行事は朝鮮王朝にもあった。雨乞いには，しばしば市場を移したことが記録に残っている。市場には，棄市といって，刑死者の屍体を曝す風習があった。市場を移して雨乞いをする前に，囚人を処刑して天帝に供犠し，雨乞いのために市場を移すとき，刑死者の白骨をも移動させたのであろう。

イスラエルの初代の王サウルの死後即位した第2代王ダビデの雨乞いと，朝鮮王朝第3代王太宗の雨乞いは，太宗の死の日であり，第4代王世宗によって行われた。サウル王の遺骨は別の場所である王の父の墓に移された。李氏朝鮮の場合は，王の死後，遺骸は生前の生活の場の安置され，殯が行われた。殯が終了した時点で納棺し，墓地に移すときが即位式であり，収穫時であり，雨乞いのときであった。

トルコのカッパドキヤには，この地がイスラム化される以前のキリスト教修道院に使用された洞窟が無数にある。たいていの洞窟修道院には1つ2つの墓室があり，その中にいくつもの墓穴が並んでいる。墓は土地の人たちにより，宝探しのために暴かれる。柳宗玄は，次のようなことを村の人から聞いた。昔は，といってもイスラム時代に（13世紀末）入ってからのことであるが，旱りがつづくと人びとは雨乞いのために墓穴からミイラを掘り出してきて，それを川に流した（柳宗玄『カッパドキヤの夏』中公文庫，1988年＜1967年，76－81頁)。イスラム正統派の観念には，墓から異教徒のミイラあるいは死体を暴き出し，それを川に流すということはなかった。この習俗は，イスラム以前の習俗と見なさなければならない。キリスト教徒はこのような

ことをするはずがないから，未開の習俗だと考える向きがあるかも知れない。文明社会にも，いわゆる未開の思想や習俗は伝承されていることは周知のことなので，イスラム教徒，キリスト教徒いずれにも伝承されたのである。紀元前のカッパドキヤ時代から存在した習俗であろう。

『旧約聖書』の「サムエル記」下の注釈は，饑饉はダビデの行為によって大麦の収穫が始まったので，その前に雨が降ったことを示唆するといっている。サウルの子孫の遺骸が埋葬されることなく放置され，その中の２人の王子の母親は，雨が降るまで処刑された息子を鳥獣から守った。この美談がダビデの心を動かして，父親サウルとヨナタンの遺骨と共に，故郷の祖先の墓に葬らしめた。これは，ダビデがサウルの家に対して敵意を抱いていないことを証するための宣伝であったとする（『新共同訳　旧約聖書注解』Ⅰ　創世記－エステル記，日本基督教団出版局，1996年，574－575頁）。

Ｊ・Ｇ・フレイザーは，Ｍ・アガベギアンの『アルメニアの俗信』（1899年，93頁）を引用していう。アルメニア人は，雨乞いするとき墓を暴いて頭蓋骨を掘り出し，それを川に投げ込む。ウルファでは，ユダヤ人の骨が喜ばれる。人びとは骨をアブラハムの池に投入する。（『金枝篇　第３版　第１部　呪術と王の発生』第１巻，ロンドン，1911年，285頁）。古代エジプトの場合は黒いアピス聖牛の首をナイル川に投入した。ダビデ王はサウル王と王子ヨナタンの骨を掘り出し，野曝しにされた７人の王子の骨を集めて父祖の墓に収めた。「サムエル記」には，骨を川に投じたとはいっていないが，雨を手に入れるためのまじないであったことは確かである。トルコの伝承では，キリスト教徒の墓に眠るミイラを昔のイスラム教徒は掘り出して川に投じた。西南アジア一帯には，古来，同じような手続きで雨乞いが行われたことが分かる。

中国春秋時代の伍子胥（？－前485）は，父と兄を楚の平王に殺されたために呉に仕え，楚を破った。楚王昭王を捕えることはできなかったが，平王の墓をあばき，その屍をとり出して300回鞭打った。楚の大夫申包胥は秦に救援を求め宮門の前で７日７夜泣いた。伍子胥は，公子光が呉王僚を刺殺し

呉王闔廬（こうろ）として新たにつくった呉の建国につくした。しかし伍子胥は2代目の呉王夫差に死を賜わり自刎する。王はその屍を墓からひきずり出し，馬の皮でつくった袋に入れて揚子江に投ずる（司馬遷『史記』（中）伍子胥列伝，野口定男訳，平凡社，1969年)。平王の屍を鞭打つ行為は，新王朝設立のあと行われた雨乞い儀礼の名残である。宮門の前で泣いたとあるのは，降雨を願う儀礼がこのような形をとり，伍子胥の親友がその役目を果たした。伍子胥の屍を牛馬の皮の袋に入れて川に流すのも，刑罰として行われる以前は雨乞い儀礼であったと考えられる。

アッバス王朝（750－1258）の創立者アブドッラー将軍はウマイヤ王朝(661－750）の一族80人を宴会に招き，宴会の席で彼らを皆殺しにし，まだうめき声を上げている者の上にも獣皮をかけ，そのそばで食事をつづけた。アブドッラーはウマイヤ王朝を滅すと各地にあるこの王朝のカリフらの墓をあばき冒瀆を加えた。ことにヒシャームの遺体はミイラになっていたが，80回鞭で打たれ焼いて灰にされた。信仰心のあついウマル2世の墓だけは暴行を免れた（P.K.ヒッティ『アラブの歴史』上，講談社，1982年，542－3頁)。

王朝の代わり目に死体に獣皮をかける習俗は，伍子胥の場合も同じであった。いずれも水神を活気づけ雨を降らさせる呪術であった。ミイラになったカリフの遺体を打つことは雨乞いを表わした。

ボルネオ島に住む先住民であるダヤク族は，首狩りとロングハウスで有名である。彼らは虎の頭蓋骨を1つ，頭蓋骨部屋に安置する。部屋の入口の左右の棚には，人間の頭蓋骨が積まれる。虎の頭骨を他処へ移すと大雨が降る。頭骨に触る者は霊に撃たれて死ぬ。さらに村全体が洪水で滅びる（J・ヘイスティングズ『宗教・倫理百科辞典』第1巻，エディンバラ，1908年，530頁)。毎日スコールがあるような地方では，旱魃はまずありえない。古い伝承はこのような地域では，頭蓋骨を移動することは，豪雨をもたらす。したがってそれを触る者は死ぬことになる。このようなまじない乃至は儀礼を行ったとき，誰かが供犠される習慣があったのかも知れない。前述の『ペルシア民俗誌』には，タバリスタン地方の山の中にある雨井戸についての記述があ

る。降雨が少なく何年も水不足になると，この地域の住民はニンニクを潰してこの井戸に投げ込む。こうすれば雨が降る。しかし彼らの経験では，ニンニクを潰した者はその年の中に死ぬ（274頁）。ニンニクは，人間や動物の首や頭蓋骨と同じ穢れと見られたので，観念的には同じものである。因みに，ダヤク族と朝鮮人の間に虎の首を用いて雨乞いをする習俗があるのが興味深い。

淳仁天皇の天平宝字７年５月28日，旱りがあったので，畿内４か国の神々に幣帛を奉った。その中でも，丹生（にふ）川上神社の神には黒毛の馬を付け加えた（『続日本紀』３，直木孝次郎他訳注，平凡社，1990年，105頁）。吉野の丹生川上神社は，雨乞いの神社として名高い。牛を奉納するのではなく，黒い馬を幣帛と共に奉った。ただの黒馬ではなく，特徴のある黒馬であった。聖武天皇の天平３年12月２日，甲斐国が神馬を献じた。身体は黒で，たてがみと尾は白であった。門部（かどべ）王らが神馬は河の精であると奏上した。天皇は雨乞いをしたとは書いてないが，大赦したとあるので，新年を迎えるにあたり，雨乞いの儀式が行われたと考えてよい。

甲斐の神馬は，エジプトの聖牛アピスを想起させる。黒白のまだらは，旱りと降雨，死と再生を表象する。黒が主体をなす馬は雨乞いに，白が主体をなす馬は日乞いに用いられた。光仁天皇の宝亀６年９月20日，長雨のため，丹生川上の神と畿内の群神に，白馬と幣帛を奉納した（前掲書，４，1992年，56頁）。白馬は白を主体とした馬であるが，特定の部分に黒がある馬であったと考えられる。黒馬は雨雲を，白馬は白雲を表象したであろう。古くは，黒馬と白馬２頭を供犠したと考えられる。黒白の馬は２頭で１体をなした。それは門神となった開口の仁王と閉口の仁王が，２体で１体をなすのと同じである。白黒は１頭の馬の属性であるが，独立した２頭の馬と認識されるようになる。

古代イランのゾロアスター教の神話には，巨大な川が流れ込む，多くの入江のあるウォル・カシャ海という大海があった。この海からは他の川が流れ出ていた。シリウス星のティシュトリヤ神が海面から水分を取り出し，雲に

して雨を降らせた。ティシュトリヤ神は毎年，白馬の姿になってウォル・カシャ海の岸辺に降りてゆき，醜い無毛の黒馬の姿をした旱魃の悪魔アパオシャと会い闘争する。もし人びとがティシュトリヤ神に十分に祈りや供物を捧げておれば，アパオシャは撃退される。神は海に飛び込み，雌馬の姿をした海の波と出会い，多くの水を生み出す（M. ボイス『ゾロアスター教』山本由美子訳，筑摩書房，1983年，11頁)。ゾロアスター教では，雨乞いが白馬と黒馬の闘争で表象される。黒馬は水分を含んだ黒雲ではなく，旱魃を表わす。黒馬は闘争に敗れると，その首が川に投入されるのではなく，白馬が川に飛び込む。『漢書』には白馬を沈めて水神を祭ったという（別所梅之助『聖書民俗考』有明書房，1975年<1933年>）ので，雨乞いには黒馬のみを使ったとはいえない。ゾロアスター教であるので，白黒の馬は二元論的に表わされる。黒馬は悪とされるが，殺されて雨をもたらすという伝承は失われた。

川の神は男性神の場合と女性神の場合があった。ウォル・カシャ海に流入する川の神はアナーヒター女神であった。門神である仁王はかつては境界で祭祀される主神であったが，奥に本殿が建ち，そこに祭られる神（仏）が主神になった。この仁王が1体で2身をもつことは前述したとおりである。水には2面性があり，1つは生命の水としての面であり，他は洪水などで生命を害する水としての面であった。淡水と鹹水の別もそれであり，真水と塩水にはそれぞれの（女）神がいて，魚類を統治した。2つの女神は，1つの神のそれぞれの1面である。アナーヒター女神には淡水の女神と塩水の女神，生命の水の女神と死の水の女神としての面があった。1体2身の神は2つの祭壇で祭られた。人の出入りの多い水商売の家の前では，毎朝塩を1掴み左右に置くが，これは古い小型ピラミッドで祭壇であった。『肥前国風土記』神崎郡，船帆郷の項に高さ6尺と8尺の2つの石があり，2つの石に祈ると妊娠する。また高さ4尺と3尺の2つの石があり，旱りつづきのときに祈ると必ず雨が降るとある　カール・B・レーダー『死刑物語』（西村克彦・保倉和彦訳，原書房，1982年）にいう。マヤ人は旱魃がつづくと雨の神に犠牲を捧げた。たいていは，奴隷の娘を深い泉か海に投入するやり方だった。泉

の一つは，直径が約50メートルの火口湖で，水深は約15メートルある。人びとは犠牲者に雨の神への伝言を托し，供物と共に水中に突き落とす。女たちは水中を泳ぎまわり，力尽きて溺死する。米国の考古学者は，この泉から15人分の人骨を発掘したが，ほかに金の飾りや祭器も出てきた。ほかに，ナイアガラ瀑布も昔は犠牲を捧げる場所であった。周辺に住むインディアンの部族が刈り入れどきに3人の娘を供犠した。その最後のものは1780年であったといわれる（56－57頁）。2人の犠牲は，生と死を表象する神の2つの属性を表象するもので，神そのものであった。奴隷，捕虜，囚人，貴族の子女は，供犠に際しては何ら区別されることなく，聖視された。ナイアガラ瀑布のインディアンは3人の娘を供犠した。神の属性は，99乃至100まであるので，3身1体の神に捧げたことも考えられる。また，水神，雲，風の3神に供犠したとも考えられる。黒いアピス牛や黒い馬も，特定の白の部位がある。これらの牛馬は神そのものであるが，1体の中に2つの属性を具えていたということができる。

古代メソポタミアの新年祭には，比較文化学の手法によらなければ理解できない行事がある。バビロニアの首都バビロンではニサン月1日つまり新年の前夜に罪滅ぼしの儀式が行われた。祭司たちは穢れから遠ざかった。2日に，冶金師と金細工師が，高さ70センチくらいの2つの像をつくり，それぞれの像に赤い服を着せた。2つの像は6日まで神殿に安置され，食物が供えられた。6日，供物を捧げる人は像の頭を叩いて願いごとが叶えられるように祈った。そのあと像は引き倒され，首を切られた。その頭には糞尿がかけられ，ユーフラテス川に流された。3日には多くの羊が屠られ，肉は皆に分配された。4日，大祭司が新年における創造の叙事詩『エヌマ・エリシュ』を朗読した。その間，天神アヌと最高神エンリルの像のお旅所は覆い隠された。そのあと羊の首が切られ，人間の穢れが羊に移され，首と共に川に投げ込まれた。5日，王は身体から王笏，指輪，剣などのレガリアをはずされ，ベル神の前にひざまづかされた。ベル神は王の祈りを聞き入れ，レガリアを王に返したので，王は王権を取り戻した。10日，王と女祭司の間で聖なる結

婚が行われた。11日，新年祭は終わり，人びとは去っていった（冨樫庸一「古代メソポタミアの祭礼考－新年祭を中心に－」『日本オリエント学会創立三十周年記念オリエント学論集』日本オリエント学会，1984年，465－481頁)。

新年には雨乞いの儀式が行われ，即位（更新）式も新年に行われた。新年は死からの再生の節目であったので，これらの儀式が行われたのである。2つの神像をつくり，赤い服を着せたが，これらの神像は1つの神の2つの属性の表象であった。いずれの神像にも赤い服を着せたが，改めて生命を賦活する意味があった。水子の像，地蔵，還暦者が赤い衣裳を着けるのと一般である。この像は，新年祭の前半で祭られたが，前半は死に属していたので，死の世界の像であった。死の世界の像にも，生と死の2つの属性があった。2つの像は，よもつへぐいに相当する食物（日本風にいえばお節料理）が供えられた。像は首を切られる前，頭を叩かれた。これは，死者を打つ行為で，これによって死者を再生させる意味をもっていた。

このあと，2つの神像の首を切って川に流す。エジプトでは聖牛アピスの首を川に流したが，この首は額に白い星印がついていた。この首には黒と白，つまり死と生の属性が内在していた。メソポタミアの場合は，死と生の属性はそれぞれの神像に内在していたと考えられる。エジプトでは，アピス牛の首に罵詈雑言を浴びせて穢し，ナイル川に投入した。首をナイル川の神に供えるのであるが，聖牛は川の神の化身とされた。化身を殺すことによって，その力を川の神に移し，雨を降らせようとしたのである。あの世の神にとっては，この世の罪穢れがご馳走になった。この世とあの世は全ての価値観はあべこべであった。神像の首は糞尿をかけられて穢され，ユーフラテス川に投じられた。埋葬された遺体は，体内のガスのため，汚物が体外に押し出され，汚物と腐臭にまみれている。この世に出現した祖先神を殺害してその力を川の神に移して，雨を降らせてもらい，その遺骸をあの世に送るに際してあの世における死者の状態をつくったのである。遺骸やミイラを墓中から暴き，川に流す例を挙げたが，同じ精神によるものである。

日本では，雨乞いに際して，山上にある巨大なへそ石の凹みに糞尿を流し

込むと，竜神が怒って雨を降らせるという俗信があちこちにあり，江戸時代に書かれた名所図会類にその記録を残している。あるいは民俗学の事例としていくつか見られる。兵庫県飾磨(しかま)郡の夢前(ゆめさき)川の水源地方に亀ケ淵という所があり，この淵を汚物で汚すときは必ず降雨があると信じられている。そこで，農民同様に敏感であった相場師や投資業者が牛馬の内臓をここに投げ込んで天候の荒れるのを待つことがあった。村民はこの淵が故意に汚されるのを防ぐために，干天の日などは村で見張りをたてたほどであるという（『日本大百科全書』1，「あまごい」1984年，541頁)。

中山太郎『日本民俗学辞典』（名著出版会覆刻，1975年＜1941年）に貴重な例が挙げてあるので摘記しておこう。摂津川辺郡稲野村の雨乞いでは，生瀬川の水源である溝滝に馬の首を切って投入する。この馬は白に黒の斑点あるものに限る。馬の首切りは岩の上で行う。年によって，首を切る真似をして，傷口から血を絞り出し，岩に塗って帰る（『内外珍談集』)。尾州東春日井郡坂下村では，村民総出となって2頭の馬を曳き出し，それぞれの馬の背に籾俵2俵と雷神に雲を載せ，2日間にわたり囃しながら社寺をめぐる（『東春日井郡誌』)。越前の丹生今立南條の雨乞いでは，池の中に2匹の牛がいるので，それを引き揚げれば雨が降るというので，大勢の男女が牡牝に分かれ，池の中の岩に綱を結いつけて引く。こうすれば降雨があると信じられている（『諸国珍談集』)。備後雙三郡八幡村の矢淵の滝の藤蔓に，血の滴るような仔牛の首が2つ結び付けてあった。これは古い雨乞いの作法であるが，同村にその後大雨があった（『都新聞』大正13．9．2)。信州上伊那郡大出村にある高橋権現の社宝に獅子頭が2つあった。村人が雨乞いをするとき，これらの獅子頭を水に浸せば必ず効果があったが，今は頭1つを失った（『伊奈志略』巻三)。中山の集めた資料は，現在では殆ど目にすることはできないが，共通の特徴をもった事例である。

中山太郎はその『日本民俗学』1（大和書房，1976年＜1930年＞）の中で南方熊楠談として次のような話を伝えている。紀州田辺町の近くの富田村庄川に滝がある。懸崖の下に棚岩があり，その前に淵がある。旱魃のときは牛

の首を切り，特志の農夫が首をもってこの淵を泳ぎ渡り，棚岩の上に首を供えて帰る。そうすると必ず大雨が降る。ある年など，あまりの豪雨に農民らが困惑したことがある。昔は実物の牛の首を切ったが，近年は張り子で間に合わせるようになった（289頁）。

この話は，南方熊楠が明治44年10月15日夜から16日夜にかけて書いた柳田国男宛書簡に出てくる。南方はこの話を地域の多芸博学の広畑岩吉から聞いたと書き記した。棚岩に牛の首をもって泳いでいった特志の農夫は，書簡では被差別民の呼称で呼ばれている（『南方熊楠全集』8，平凡社，1972年，181頁。『柳田国男　南方熊楠　往復書簡集』平凡社，1976年，132頁）。牛の首は，屠殺者自身が棚岩に置きにいったことが想像される。ヘロドトスの伝えるところでは，アピス聖牛の首はギリシア商人がいる場合，彼に売った。ギリシア人がいないときは，首はナイル川に流したという（『歴史』2．39）。エジプトでは，聖牛はエジプト人らによって屠られ，死体の処理は異邦人であるギリシア人に委せられた。聖牛屠殺も，祭りに集まったエジプト人の間で，ギリシア人が執行したのかも知れない。日本の雨乞いではえた（被差別部落民）が登場する。恐らく，淵を血で汚し，内臓も投入されたと考えられる。現在，聖性に対する観念が変化，衰退してしまったため，差別を助長するのみとなった。南方によると，この部落民に米1俵をつかわしたという。この淵は非常に危険な所らしく，あとでこの部落民は，米10俵，20俵くれても行く所ではないと語ったという。米俵は，本来は牛の首と共に供える供物で，作業をする者に対する報酬ではなかった。

柳田国男が明治44年10月11日，南方熊楠に出した書簡にいう。柳田の郷里播磨では，旱魃の年に馬の首を切り，これを川上の淵に投ずると雨が降るといわれている。他の国においてもこのことを聞く。これは汚穢をもって水神を怒らすのだというが，単にその目的としては仰山に失する。これも，『遠野物語』のオクナイサマと同じ系統の思想と思われる。あるいは，牛の首を切って川に投入するともいわれている。馬首という地名は聞かないが，牛首（うしくび）という地は東西諸地方にある。ウシクビリバ，ウシトキバ，ウシコロシバな

どもある。これも単に，えたの職業としての屠畜のことではなく，信仰に関係するものと思う。

中国では，牛を食うことを非常な悪事とする１つの信仰があった。古くから近代に至っても，牛を殺して地獄に落ちた者の話がある。しかるに，日本の漢神には牛を殺して祭ることが往々あり，朝廷もこれを禁じている。この風習は京師辺りまで流行していたようであるが，牛祭派は終いに敗北したようである。首切り馬の伝説も起源はこの辺にあり，最初は馬を屠って神を祭ったと思うが，どうであろうか。えたが牛を屠りその肉を食ったのも，いわゆる餌取り（えたの語源の一つ）の所用としては大げさであり，食料としても物好きである。牛角，牛皮などの生産の副産物を利用したのか，帰化前から牛を食う慣習があり，これをやめなかったからだというべきであろう。とにかく，純日本人の職業の１種というだけでは納得できない（前掲往復書簡集，115頁）。

この書簡で，馬の首を淵に投入するのは汚穢で水神を怒らせ，雨を降らせるのではないという柳田説は正鵠を射ている。柳田もいうように宗教に関係するものであった。柳田国男『遠野物語』（69）に出るオシラサマ伝説の切られた馬の首と同系統のものである。牛首などの地名も信仰に関係したものととらえたのは正しいといえる。

山頂にあるへそ石の凹みに汚物を入れたり，雨乞い石に汚物を掛けるのも，神を怒らせるためではない。神を怒らせては，人間の願いは成就しない。韓国では雨乞いをするとき，忠清北道では祭壇を設け，豚を屠りその血を祭壇の四方に撒布したり，犬を屠りその血を四方に流す。これは朝鮮総督府が1938年にまとめた『釋奠・祈雨・安宅』に収録されている（佐原　真『騎馬民族は来なかった』NHK ブックス，1993年，177～178頁）。朝鮮では豚や犬を犠牲としたとき，その頭はどうしたのであろうか。今村，前掲書には，虎の頭骨を滝壺や淵に沈め，淵の中の竜を怒らせて雨を降らせたとある（441頁）ので，豚や犬の頭も同じ扱いをしたであろう。祭壇は川原や山頂のような境界に設けられたので，頭は川や山頂に投棄されたと考えられる。日

本では各地に井戸・泉などに牛馬や鶏を殺してその首を投げ入れたり，血を塗りつけたりして雨乞いをする風習があり，それは水の神の住む神聖な場に不浄のものを投げ入れて，神を怒らせて雨を降らせたのだという高谷重夫『雨乞習俗の研究』（法政大学出版局，1982年）の説を挙げている。

日本では神社によっては神馬（しんめ）を飼っている。これらの神馬は白の強い葦毛の馬である。古く正月７日の白馬節会（あおうまのせちえ）で用いられた馬は，青馬つまり黒毛の多い馬で，白毛が混ったものであった。馬齢を重ねると共に，白毛の割合が増す。青馬（白馬）は，黒白まだらの馬で，死と再生の儀礼で用いられる馬であった。この馬が降雨や止雨の願かけに用いられたが，この場合，馬は殺されることはなかった。ことに，これらの葦毛が天子の乗馬であった場合はことさらである。殺さない習慣は古くからあった。『山城国風土記』逸文によると，欽明天皇の御代に，国中，風が吹き雨が降って人民は嘆き悲しんだ。これは賀茂の神の祟りであるということであった。そこで４月の吉日に，馬に鈴をかけ，人は猪の頭のかぶり物をして，馬を駆けさせた。この結果，五穀はみのり，国中，平安になった。賀茂の祭礼で馬に乗るのは，このときから始まった（『風土記』吉野裕訳，平凡社，1969年，275頁）。

近世大阪の箕面では，雨乞いに葦毛の馬が用いられた。嘉永６年（1853）黒船が来航したとき，この地域は旧５月19日から10月７日までの140日ほど，ほとんど雨が降らなかった。そこで地域の村々は金を出し合って，かわた（えた）に葦毛馬を買わせた。初夜の頃，箕面山に馬を曳いてゆかせ，首を刎ね，胴は谷に蹴落とさせた。首は箕面の滝の上流の雄滝（通常見るのは雌滝の方）に浸けさせた。何の効果もなく，翌日少し曇り，少し時雨（しぐれ）があった程度であった（寺木伸明『近世身分と被差別民の諸相』解放出版社，1999年，217－８頁）。つづいて同書にいう。19世紀の末頃，かわたが岩の上で白馬を殺しその血で岩を汚して雨乞いをした。

正月７日は人日で，それまでの６日間は正月の前半で死の儀礼を行う期間であった。人日は後半の再生に入る最初の日で，この日に人間のよみがえりの儀礼があった。白馬の節会があったが，馬は十二支の後半の最初にくる動

物で，再生した人間の魂が最初に宿る宿主であった。白馬をあおうまと読ませる。この馬は黒白まだらの馬であるが，ことさらに青という色合いを出したのは，青が黒と同様死を象徴する色とされたからである。現在の中国人も，死者には濃紺の屍衣を着せる。東大寺の修二会の2月5日の実忠忌において過去帳を朗読しているときに現れた青衣（しょうえ）の女人もあの世から実忠忌に出席した女人であった。女人と実忠は形式的には母子の関係にあり，マリアとイエス形の古代の母子神の表象であった。

猪（豚）は，十二支の最後に出てくる動物で，このあと，人間は完全に再生した姿で現れたのであろう。『山城国風土記』逸文で見た止雨の願かけで，猪の面をつけた男が馬に乗って駆けた。分かりにくい儀礼であるが，豊穣儀礼であったことは間違いない。十二支の後半の最初と最後の動物を用いて，後半の再生儀礼を修したのであろう。日本の正月の門付（かどづけ）の芸能の一つに春駒（はるごま）がある。棒につくり物の馬の首を刺して予祝をする。前述したイランの雨乞いでは，ロバの生首を棒に刺し丘の上で薪に火をつけて焼く。『山城国風土記』逸文の記事から見ると，馬は生きており，騎乗するのは猪（の面をつけた人間）である。このような儀礼に用いる馬は葦毛であった。白馬節会に曳かれた馬は人びとに打擲された。形式からすると，21頭の白馬の1頭は首を切られたであろう。宮廷儀礼とは別に，民間で行った儀礼では，それは春駒のようなもので，棒の先端に車輪をつけ，猪の面をつけた男が棒に跨って駆けた。

石田英一郎『新版河童駒引考』1965年（『石田英一郎全集』5，筑摩書房，1970年所収）にいう。馬の首は豊饒力の象徴としてヨーロッパの農民の収穫祭ばかりでなく，古代ローマの8月馬（オクトベル・エクウス）の供犠においても用いられた。馬は穀霊で，マンハルトもいうように，穀霊の殺害と復活の儀礼である。馬の首は，パンを連ねた紐環で飾られ，この馬の首をめぐって，スプラと聖道両区の住民の間で争奪戦が演じられた。前者が勝てば王宮の壁に，後者が奪えばマミリウスの塔に馬首が掛けられた。日本でも馬の首を門口などに掛けておく習俗は各地に残存し，奥羽地方などにも近年まで広

く見られた。オシラ神の像は馬頭のものが多く，馬首あるいは馬皮飛行譚，オシラの川投げや井戸浸し，馬頭の大烏帽子を被って馬の所作を踊る東北農家のエンブリ舞い（旧暦小正月の予祝行事）などに現れる（100頁）。

石田は上記の論考の注に，佐々木喜善（1886－1932）が『郷土研究』5巻1号（1931年）に掲載した「馬首飛行譚」の論考を挙げている。それによると，佐々木の村ばかりではないが，昔は馬が死ぬとその首を切りとり，家々の門口に杭の端に掛けて立てておく風習があった。佐々木が少年のころには，50軒の部落の3分の1あるいはその半分くらいまではそうしていた。ある家には3つも4つもの馬の頭骨が雨晒しになっていた。彼の家でも，12年前までは3頭分の頭蓋骨が石垣の上にごろごろしていた。彼らの祖先の時代には，家ごとに皆そうしてあったことは想像に難くないということであった（21頁）。

中近東の農村の家の入口には，カモシカの頭蓋骨と角が入口正面の壁に埋め込んである。外部の者らの邪視から家を守るためのお護りであるといわれる。イランには馬の頭骨を入口に付ける習慣はないようである。J・ヘイスティングズ『宗教・倫理百科辞典』（エディンバラ，1908年）によると，ドイツには馬の頭骨を入口に付ける習慣があり，邪視除けのためとされる。ドイツをはじめヨーロッパ各地で，破風に馬の像を彫る（第1巻，519頁）。アメリカ・インディアンの主長の埋葬には白黒まだらの葦毛の馬を陪葬した。馬の白い胴には，葬儀参列者らが押した赤い手型が見られた。奈良県五條市黒駒町の黒駒古墳から，馬と見られる線刻画のある陶棺（7世紀初め）の破片が見つかった。馬は被葬者の霊魂を冥界へ乗せてゆくものと考えられている。古墳は6世紀終わりごろに築かれた直径約10メートルの円墳で，陶棺は7世紀初めに追葬されたらしい（『毎日新聞』2000．3．16，他）。

馬の首を柱に掛ける風習は，春駒の馬の首とそれを刺した棒を想起させる。イランでは前述したように，棒にロバの首を刺して山（ホラサン地方の山には樹木がない）に登り，薪を燃やしてロバの首を焼く。イランではこれは雨乞いである。馬は一概に穀霊であるといい切ることはできない。馬に乗った猪の面をつけた男こそ穀霊で，馬は冥界から穀霊を運ぶ乗り物であった。石

田は前掲書で，オシラ神が冬の初め穀物の種子をもって天に昇り，春3月再びその種子をたずさえて下界に降りてくる信仰があると述べている。馬頭は邪視除けの護符というのは後世の変化で，馬が運んできた穀物の種子を播いたあと，適当な雨が降ることを祈願して各家の門口や破風に馬の頭骨の実物や彫刻を据えたのである。

因みに，前述した黒駒古墳出土の陶片には馬の彫刻が見られたが，同じような絵がアフリカのブッシュマンの壁画に見られる。この絵は「虹を背負う女の雨」の題をもつもので，形はブッシュマンの説明によると牛のようで，その身体全体を上を黄，下を赤の2色の虹が覆っている。その他にもブッシュマンの壁画の中には「雨の牡牛」あるいは「雨の牝牛」と呼ぶ動物の図が多い（石田，前掲書，88頁，図10)。黒駒古墳の陶棺に彫られた馬の絵は，ブッシュマンの絵と並べた場合，牛であるかも知れない。あるいは，ブッシュマンには馬が存在せず牛しかいないので，両方の動物の尾が馬の尾の特徴をもっていることから，ブッシュマンの呼称の方が改新形であるとも考えられる。ブッシュマンの絵画では牛を覆う天空の曲線は虹である。黒駒古墳の陶棺の絵画の上部の曲線は，馬の背であり虹の曲線である。虹は前述したように，市の設定に関係のある天然現象であり，雨乞いと関係するものであった。ブッシュマンの虹と牛の絵画は洞穴の中にある。洞穴はこの世とあの世の境界であるので，門口における馬や牛の儀礼と同じものである。東南アジアの島嶼部には，家屋の入口の柱に，水牛の角を数多く積み上げる風習がある。これらの角はときに頭骨を伴う。その数によって祖先祭りのために費した財力を誇るのだと説明されている。水牛は祖先獣である。祖先獣を殺して地上にいる子孫はその力にあずかるのである。水牛はエジプト人のアピス牛に相当する。島嶼部では雨乞いは必要ではない。日乞いも必要ではない。ここでは祖先祭りの財力の象徴にとどまる。古くは祖霊が家と村を守り，豊穣をもたらすとされたと考えられる。それは乾燥地域での降雨であった。墓を暴いて死者の頭蓋骨を掘り出し，川に投げ込むアルメニア人の風習や，虎の頭を川に沈める朝鮮人の風習は雨乞いのためとされるが，同一の考え方によるもので

ある。

移動したあと北海道，サハリン，千島，東北地方に定着したアイヌの故土には，牛や馬がいなかったようである。アイヌの間には雨乞いの習俗がある。J・バチェラー（1854－1944）はアイヌにキリスト教を伝道するかたわら，アイヌの言語や伝承を研究した。彼がある村の首長宅に滞在したとき，村のまじない師が，最近雨が降らないのは，アイヌが自分の神を敬わず，キリスト教の神を崇めるからだ。神罰が下りひどい飢餓がくる，といった。バチェラーはまじない師に雨乞い競べを挑んだ。アイヌのまじない師は狐の頭骨に願かけをした。バチェラーの方は信徒らと祈祷会を開き，聖書を朗読した。バチェラーのいうところによると，神様がバチェラーらの祈りを聞き入れたらしく，夜中には本当の雨が降った（荒俣宏『開化異国助っ人奮戦記』小学館，1991年，221－222頁)。アイヌの呪術師は，雨が降ったのは自分の願かけの結果であると信じたにちがいない。荒俣，前掲書は巻末に各章の参考文献を挙げるが，どの文献のどこから引用したのかは判らない。動物の頭骨を雨乞いに使用するのは定石どおりと思われる。狐といえばキタキツネのことであろう。そうするとアイヌが北海道に定着して以来の伴侶である。

バチェラー自身の著作であるジョン・バチラー『アイヌの伝承と民俗』(安田一郎訳，青土社，1995年）はいう。アイヌの雨乞いには2通りある。アイヌが雨乞いの儀式をするとき，雨乞い師は火の女神，川の女神，春の女神に祈願文を唱える。ある男は仲間を川岸に連れてゆき，各自が自分のタバコ入れと煙管を洗うのを見とどける。もう1人の男は小さい魚を捕まえ，煙管に火をつけて吸い口を魚の口に入れる。魚は口を閉じて煙を吸い込む。煙はえらから出てくる。魚は水に放たれて自由にされる。別の人びとは深い皿に帆をとりつけ，それが舟であるかのように櫓を入れ，村や広場の境界である者はそれを押し，ある者はそれを引く。別の人びとはふるいで水を撒き散らす。雨を待ち望んでいたあるアイヌは，犬に風変わりな服を着せ広場を連れ廻った。その晩，土砂降りの雨が降った。

雨を降らせるもう1つの方法がある。狸はせっかちな気質なので，話しか

けるとすぐに聞きとどけてくれる。そこで狸を犠牲にしてその頭にイナオを捧げそれに祈る。漁師が漁場にゆくときは狸の頭骨をもってゆく。天候がおだやかで，ひっきりなしに働かねばならないとき，休息をとるために海が荒れることを望む。人びとは夜，狸の頭骨をとり出し，凪ぎが長くつづいているので仕事もつづき，非常に疲れている。働かなくてもよいように，悪天候にして欲しいと祈る。人びとは狸とテンの毛皮の手袋と帽子をつくり，それを身につけて踊る。すると大きな嵐を引き起こす（280－281頁)。

アイヌの雨乞いでは，煙管のやにを洗った。タバコがアイヌに用いられるようになったのは新しいことである。タバコのやに以前には何を洗って川を汚したのであろうか。もちろん犠牲獣の血で汚した。川の主であり，川の神である魚にタバコを吸わせるのは，川と川の神を汚すことであった。タバコ以前は，同じように犠牲獣の血を用いたであろう。川の神をこの行為によって怒らせ，雨を降らさせたと考えたようであるが，そうではなかろう。あの世は全てこの世とは逆さになっており，神を汚すのは神を冒瀆することではなく，神を活性化することであった。舟の模型をつくり，村境や祭祀空間の境界で，人びとは揉み合って舟を押したり引いたりした。雨乞いに際して，市場を閉じて他の場所に移動する習俗があった。境界で揉み合って舟を押し引きするのは，境界を移動することによって，祭祀対象である神を賦活することを意味した。この境界は虹の弧が大地と接触する場所と同じもので，水や舟の表象はその記憶の名残である。前述したように，ボルネオの原住民であるダヤク族が雨乞いをするとき，頭蓋骨安置小屋の虎の頭蓋骨を移動するのと同じ意味をもっていたのである。

アフリカの白ナイル川の流域に住むシルルク族の王朝の始祖ニャカングを祭る廟は2つある。廟といっても，小屋とそれをとり巻く垣根からできている。これら2つの始祖の廟で，毎年2度の大祭が行われる。1つは雨乞いの儀式であり，他は収穫祭である。雨乞いに際して，王は一方の始祖ニャカングの廟の戸口で牡牛を屠り，始祖に向かって雨を降らせて下さいと祈る。できるだけ多くの血をふくべの容器に集め，それを川に流す。あるいは，牛の

背に致命的でない傷を槍で与え，川の中を死ぬまで歩かせる。その間，牛の血が川の水を赤く染める。牛の骨も丁寧に集め，川に投入する（J．G．フレイザー『金枝篇』第3部『死にゆく神』ロンドン，1912年，19－20頁)。

ナイル川上流のスーダンに居住する白ナイルのシルルク王朝の始祖廟は，古代エジプト王朝の上社と下社と同じように2つある。日本の皇祖天照大神を祭る伊勢神宮の内宮と外宮のようなものである。「上社と下社のこと」や「二つの祭壇と二つの神殿」については，井本英一『聖なる伝承をめぐって』(法政大学出版局，1999年）で論じた。シルルク族の雨乞いでは，牛の首を切って川に流すことには触れていないが，下流のナイル川のアピス牛の行事を考慮に入れれば，この伝統は保持されたと考えられる。シルルク族が殺害する牛は，王朝の始祖ニャカング自体あるいはニャカングのトーテムであり，シルルク族のトーテムでもあった。

聖牛アピスは黒い身体に白の部分のある牛で，死（黒）と再生（白）を1つの身体の中に表象した。別の文化では，黒と白2頭の牛や黒白まだらの2頭の牛が雨乞いに用いられた。ニャカングの廟では牡牝2頭の牛が連れてこられ，牡牛が供犠される。牝牛は廟に所属する牛の群れに加えられ，殺されることはない（フレイザー，前掲書，25頁)。ここでは牛は毛の色ではなく，性別によって死と再生が区別される。フレイザーによると，始祖ニャカングあるいは彼の後継者の1人が特定の人の夢に現れる。夢に現れたのが始祖であるか，何代目の王であるかを確認したあと，その廟墓で牛を屠り雨乞いをする。

小学校教員瀬川丑松は，天長節の夜は当番で宿直室で過ごした。翌朝，止宿先の蓮華寺の寺男が学校へやってきて1通の電報を手渡した。見ると，父が死んだのですぐ帰れとの文面であった。丑松は父が家族と共に引き越していった第2の故郷である根津村に帰った。父は家で死んだのではなく，牧場の番小屋で死んだ。牧夫である父は1頭の黒い種牛を預かり，多くの牝牛の中に入れたところ，種牛は狂うばかりになって野獣の本性に帰り，行方が知れなくなった。父は種牛を尋ねて山を歩き廻った。手伝いの男が塩を与える

ために牛小屋にいってみると，牝牛の群れの中に例の種牛も交っていた。角は赤く血に染っていた。男は岡の蔭の熊笹の中にうめている父を探し出し，肩に掛けて番小屋に連れ帰ったが，やがてこと切れた。野辺送りのあと種牛は処分されることになった。人間を殺害した畜生は，持ち主から引き離し，有無をいわせず処分した。

1人の屠手が種牛の眉間を斧で打つと，かすかなうめきを残して息を引きとった。小屋の中で屠手の親方は出刃包丁を振るって牛の咽喉を割いた。多勢の若者が牛の上に上り，所きらわず踏みつけるので，血潮は割かれた咽喉を通して紅く板敷きの上へ流れた。咽喉から腹，腹から足と次第に黒い毛皮が剥ぎとられた。膏と血の臭気はこの屠牛場に満ち溢れてきた。瀬川丑松の父は被差別部落出身者で，牛の養育と屠殺を業とする者であった。この話は島崎藤村の『破戒』(1906年）の第6章と第10章の関係個所を要約したものである。ここでは牛の首を切り取ったり，血を集めて川に流すことは述べられていないが，牛の屠殺の状況を伝えるものとして挙げておいた。シルルク族は牛を財産として保有する部族であるが，彼らの雨乞いでは牡牝2頭の牛が用いられ，牡が屠殺された。『破戒』に描かれた牡牝の姿を見ると，供犠される牡がもつエネルギーが理解されるであろう。

シルルク王朝の始祖王ニャカングは2つの廟に祭られ，牡牝の牛で表象された。廟の傍らには白ナイルがヴィクトリア湖を経て北流する。皇太神宮（内宮）の神域を五十鈴川が流れる点で相似している。天照大神の死と再生の儀礼では牛ではなく，天(あま)の斑駒(ふちごま)が出現する。斑駒はまだらの馬で，黒白の葦毛の馬である。天照大神は斑駒の逆剥ぎ（尾の方から剥ぐやり方）にした皮を投げられて死に，天の岩屋戸の中に隠れる。神々は岩屋戸の近くを流れる天の安の河原に集合して相談する。天手力男神(あまのたぢからをのかみ)が岩戸を開けて大神を導き出し，世の中が再び明るくなった。

中国西南端，ミャンマーと国境を接するシプソンパンナのジンホン地区マンボ村に住むプーラン族が伝える昔ばなしの中に，天照大神の岩戸神話と似たものがある。巨人グミヤーは天地を創造する。太陽の9人姉妹と月の10人

兄弟はこれをねたんで地上を照らしたので，地面はからからに干あがってしまった。巨人グミヤーは高い山に登り，燃えさかる太陽と月を次々に射て谷に転がした。最後に残った太陽と月の２人は，はるか地の果ての洞穴に身を隠す。大地はまっ暗になり冷えてしまった。そこで，地上のあらゆる鳥や獣が集まって，太陽と月を迎えにいった。鳥の先頭には雄鶏が，獣の先頭には猪が立った。みんなは洞穴の岩戸を開けようとしたが，びくともしなかった。そこで猪が，遠くから走ってきて岩戸に突きあたり，岩戸を２つに割った。太陽と月が洞穴から出てきて，昼と夜の区別もできた（中国のむかしばなし『巨人グミヤーと太陽と月』君島久子文・小野かおる絵，岩波書店，2000年)。

君島が指摘するように，この民族の昔ばなしは日本神話と多くの共通点をもつ。日本神話とちがって，太陽と月が洞穴に隠れる。日本神話では旱魃のモチーフはないが，巨人グミヤーの話には旱魃のモチーフがあり，それに打ち勝つために，多くの太陽と月を射て殺す。日本神話と同じように，太陽（と月）が洞穴から再び出現するのは，秩序の回復を意味した。それは新年であり王の即位であった。天の斑駒を殺すのは，死にゆく者にトーテムの皮を被せ再生を促す行為であると同時に，雨乞いの儀礼の名残でもあった。巨人グミヤーの話では，岩戸の前にあらゆる鳥獣が集まる。ことに鶏と猪が先導役になるが，猪が岩戸を割って日月を導き出し，宇宙の秩序が回復する。猪は岩戸の前で供犠されたのであろう。鶏も供犠されたのであろう。雨神の月には猪が，日神の太陽には鶏を供犠し，雨乞いと日乞いをしたと考えられる。『山城国風土記』逸文に，賀茂社の祭りで，猪の頭を被った者が馬に乗って走ったという記事があった。この行事は日乞いの儀礼であった。欽明天皇の御代に雨風が吹き荒れ，人民が嘆き悲しんだ。日本では，馬も猪もいずれも雨乞いにも日乞いにも用いられたと考えられる。

『播磨国風土記』「賀毛郡」山田の里の飼養野（いかいの）の項に，地名の起源が述べてある。仁徳天皇の御代に，日向の肥人朝戸君（くまびとあさへのきみ）が天照大神を祭る舟の上に猪を持参して進上した。そして猪を飼う場所を賜わるよう申し上げた。そこで，ここ猪養野を賜わって猪を飼った。そういうわけで，猪飼野というのである

（吉野裕訳，東洋文庫，1969年，88頁）。ここの文章は，猪と皇太神宮，天照大神との関係を示唆している。上古の神の祭礼には，当該の神の化身である動物――猪，鹿，犬など――を殺し，それらの動物がもつ力を衰弱した神に移し，肉は祭祀者らが神と共食した。氏神の化身である祖先獣を食うことによって，神と同様，人間も再生した。猪は月神の化身ではなく，鶏と同様，日神の化身であったとも考えられる。古くは供犠動物が２つあったことは繰り返し述べてきたが，ここでも同じことがいえるのではなかろうか。太陽と月は２にして１の神で，内宮と外宮の祭神も２神にして１神であったと考えられる。一体化した神に，２つの供犠が捧げられたのである。神と宇宙の秩序の回復には，生命の水としての雨が第１条件であったので，祖先動物の殺害は雨乞いでもあった。東大阪市西ノ辻遺跡の井戸から雨乞いの馬の頭と鹿の後足の骨が出土したことが1983年７月29日の各紙で報じられた。奈良時代のものらしいが，２種類の動物の骨が出てきたことは注目に値する。この場合は，馬は黒白の斑でなくてもよかったのかも知れない。馬や鹿の身体の１部は，川がない場合は井戸に投じた。井戸は祖霊や死者の霊魂が去来するあの世への入口であった。底がよく見える浅い井戸では，井戸の水が沸き出したり一定方向に流れているのが見られる。井戸や泉は，川の水源や流れと等しいものと考えられた。

横須賀市夏島町の鉞切（なたぎり）遺跡では古墳時代後期（６世紀末から７世紀初め）の牛頭骨を使った祭祀跡がほぼ完全な形で発掘された。遺跡は直径1.4メートルのだ円形に深さ20センチに土を掘り，その中央に牛頭骨を逆さの状態で据えてあった。土坑の周りには石が並べられ，頭骨の上には飲食物を盛ったらしい坏７個と長カメ１個が添えられてあった（『神奈川新聞』『朝日新聞（東京）』『讀賣新聞（湘南）』'84．9．8，『東アジアの古代文化』39号，大和書房，1984，196頁）。

小出義治，長谷川厚「鬼高期の牛頭祭祀－横須賀市なたぎり遺跡」はいう。この牛頭は坑中に角の部分を下にし，上顎の切断部を上にして発見された。当然，祭壇には切断部を下にし，角を上に立てて供献されたと思われるので，

祭儀終了後，坑中に逆さにして投棄埋納したものであろう。その際，角を打ち欠いて取ったとみえて，両角の付け根の部分はそれぞれ頭骨が大きく損壊を受けていた。土坑に接して祭壇が設けられ，祭事に列した戸や村々の代表者がそれをとり囲んでいたと推測できる（『DOLMEN』１号，ヴィジュアル・フォークロア，1989年，174－175頁)。推測であるとするが，この見解は面白い。しかし，逆さに据えた頭骨は投棄したものとは考えられない。供犠される牛は神の化身であった。屠殺されて神と人間を賦活し，あの世に帰るとき，あの世のしきたりどおり逆さの状態で境界に置かれたのである。逆さの牛頭骨は投棄されたようには見えない。この推測を尊重すれば，通常の向きにした頭骨を，儀礼の後半で逆さにしたのではないかと思われる。

大阪市の住吉大社では６月14日，御田植神事がある。本殿での神事の間，約2000平米の神田を飾り付けられた牛が床土を踏み固める。やがて神田中央の舞台でお祓いがあり，ご神水が注がれる。舞台とその周囲では，さまざまな神事が行われ，その間，神前に供されていた苗が替植女（かえうえめ）らによって丁寧に植え付けられる。この神事が始まったのは1700余年前と伝えられる。今の山口県から植女を連れてきたといい，弥生文化の伝来ルートをしのばせる。豚や鶏の肉，花，酒などを水田のわきに供え，動物の血を農地に撒く。

大阪市平野区の長原遺跡で1990年，奈良時代初めの水田遺構に埋もれていた牛の頭骨が見つかった。田の真ん中につくられた直径５メートルもある穴に裏返しに置いた状態だった。それ以前に，皇極天皇元年（642）７月に牛馬を殺して諸神に捧げ，雨乞いをしたことが『日本書記』に記されている。平安時代以降の遺構である東大阪市・八尾市の水田遺跡である池島・万福寺遺跡からも，おびただしい牛などの骨が出土した。さらに牛を使った古墳時代の建物の建て替え祭祀跡も，97年に長原遺跡の別の場所で見つかった。水田跡の裏返し牛骨より100年以上も古いものである（『朝日新聞』'98. 7.17)。

平成12年（2000）になって，飛鳥の酒船石遺跡の一部とされる石敷きの中心に，長方形と亀形の石があることが発表された。長方形の石には長方形の凹みが穿たれ，２つの穴を通って水がその北がわにいる亀石の口に流れ込む。

亀石の背中には円い凹みが穿たれ，そこに長方形石から流れてきた水が溜り，さらに尻尾から流れ出るようになっている。これら2つの石に穿たれた方円の器は，2つで一体を成すものであった。円い器に亀が用いられたことに，亀と水との関係があった。亀は海や池に住むばかりか，アジアの内陸部では土の上で生活している。火炉と水盤には，方円を一体にしたものが多い。飛鳥の方円の石は火炉に用いられたものではなく，水盤に用いられたものである。密教の護摩壇は，四角い枠の中に円い火炉を設ける。キリスト教の洗礼盤は，四角い石の枠の中に円い水盤を穿つ。洗礼はヨルダン川の源流で行われた。それは霊界とこの世の境界において，あの世から流れ出る生命の水を身体に浴びる行為であった。方円は大地と天を象徴した。天と地，境界において新しい生命を受け，混沌から秩序に入った。

飛鳥から出土した新亀石と長方形石は，風水の観方をすれば，窪地の湧水地で，湧出した水を方形の凹みに蓄わえ，亀の背の円形の凹みに流し，外部に流出させる。亀形石と長方形石の周囲には，人頭大の石で区画された四角い空間がいくつかある。この事実は，これら2つの大きい石の周囲に人びとが立ち，儀礼が行われたことを示唆する。2つの凹みは，2にして1なる水源の表象で，この場所がこの世とあの世と境界であった。この施設は第37代（日本書紀）の斉明天皇によってつくられたとされる。斉明天皇が重祚する前の第35代皇極天皇元年に牛馬を殺して雨乞いをしたことは先述した。皇極天皇は，夫である第34代の舒明天皇の跡を承けて即位した天皇で，まず行ったのが蘇我氏の介入する政治的混沌から秩序に戻るための天の意思をただす雨乞いであったと考えられる。仮に，亀形石が斉明天皇時代のものとしても，皇極天皇は同じような施設で雨乞いをしたのではないかと考えられる。牛馬の頭蓋骨が残っていれば，決定的な証左になるのだが，頭骨が出土したことは聞かない。牛馬の首を（逆さにして）長方形石の南がわの台か水の溜った四角と円形の凹みに置いたと考えられるが，これは滝壺に牛馬の首を投入するのと同じことである。あるいは滝壺の傍にある石の台に首を置くのと同じである。

四角い凹みのある長方形の石と円い凹みのある亀形石は祭壇であった。凹みができる過程はかつて説明したことがある。死体を埋葬してその上に正方形，長方形あるいは円い土饅頭をつくると，年月と共に中央部に凹みができる。土壇や土饅頭は祭壇であるので，石などで祭壇をつくるとき，その上に凹みをつける。2つの祭壇は1つの祭祀にとって本来は必要なものであった。二元論的な意味をもち，天地，生死，男女，浄不浄などの対蹠的意味を表わした。あの世の表象である牛とこの世の表象である馬を殺し，その首を長方形の祭壇についた供物台か2つの祭壇に置いた。あるいは白馬と黒馬の首を置いた。あるいは，両方の祭壇に同一の白黒まだらの葦毛の馬の首を置いた。四角は大地を表象し，円は天空を表象する。地上と地下，地上と水中の動物である亀が天空である円表象をとるのはなぜか。石碑や柱を載せる台座である亀趺は，天と地をつなぐ石碑や柱の境界にある。亀は天の先端にあり，地の表面にいるとされたのであろう。亀は骨（甲羅，堅い外皮）が外にあり，肉が内にあるとされた。この世のものとは逆の身体構成をしているとされた。亀は天地両方を表象したのであろう。白川静『字統』（平凡社，1984年）によれば，亀は背甲と腹甲で天円地方にかなう形態をしている（147頁）。

5月5日（旧暦）は夏至の前の節日で，夏至は陰陽の分かれ目である。中国では古くから端午の節句にちまきを食べた。ちまきには亀の肉を入れた。亀は骨が外，肉が内，つまり陰内陽外の形をとる。これが古くは夏至の食物であるちまきに入れられた。このことは，ちまきに関するもっとも古い文献である晋の周処の『風土記』に出る（中川忠英『清俗紀聞』1，孫伯醇，村松一弥編，東洋文庫，1966年，37－38頁）。亀はこの世の人間の目には逆さまの表象であり，あの世の神々の目にはまともの表象であった。あの世の神々が天上にいる場合は，亀は天円の表象であったことになる。新亀石の施設が斉明天皇の造営だと仮定すると，当然の理由があったといえる。皇極（斉明）天皇の弟である第36代孝徳天皇は皇極天皇時代の蘇我入鹿の誅殺と父蝦夷の自死のあと大化改新を断行したが，難波宮に遷ったまま，そこで崩御した。皇太子（中大兄皇子）や皇后たち一族は飛鳥に去り，天皇ひとりとり残され

た形となった。飛鳥で即位した斉明天皇にはこのような背景があった。混沌から秩序へ回帰するための施設が，このたび出土した新亀石の施設であった。

孝徳天皇白雉5年（654）夏4月，吐火羅（トクワラ）国の男2人，女2人，舎衛（サウェ）の女1人が日向に漂着した。吐火羅を，タイ国のメコン川下流にあったドウァーラヴァスティ王国に，舎衛を祇園精舎で有名な舎衛（シャウェ）城（シュラーヴァスティ）に比定する説がある（日本古典文学大系68『日本書記』下，岩波書店，1965年，575-6頁）。斉明天皇5年（659）3月10日，吐火羅人が妻の舎衛婦人と共にやってきた。17日，甘橿丘の東の川原に須弥山（しゅみせん）をつくり，天皇は陸奥（みちのく）と越（こし）の国の蝦夷（えみし）を饗応した。吐火羅人と舎衛婦人とあるのは，白雉5年4月に日向に漂着した一行のうちの夫婦であることは間違いない。夫婦は飛鳥に居住していたはずで，1週間後の飛鳥川の川原での饗応にも出席したと考えられる。須弥山像を始めとする石造物は彼ら一行の作品であったかも知れない。それ以前，推古天皇20年（612）是歳に，百済から渡来した白斑の工人が須弥山像と呉橋をつくったとある。この白斑の男を，時の人は路子工と呼んだという。路子というのはイラン人名ロスタムが，ロシトあるいはロッィと呼ばれ，それを写音したもので，路子工は工人ロッィのことであろう。呉橋というのは，近時再び話題になった48メートルの高さにある出雲大社の本殿に昇る階段の類で，古代西アジアの神殿ジッグラトに昇るための階段も同類である。路子工は御所の南庭に須弥山像と呉橋をつくったとある。須弥山像は，現代残っている3メートル余りの須弥山石よりはるかに大きいものであったと思われる。

斉明天皇3年（657）7月3日，覩貨邏（トクッラ）国の男2人，女4人が筑紫に漂着した。さっそく早馬で飛鳥に召した。15日に須弥山像を飛鳥寺の西につくり，盂蘭盆会を修した。夜になって覩貨邏人に饗宴を賜わった。覩貨邏人のことを墮羅（ダラ）人ともいった。斉明天皇6年7月16日，覩貌羅人乾豆波斯達阿（ケンドウバルシクダルア）は本国に帰りたいと申し出て，妻を人質として留めておくといい，数十人と共に西海の道を去っていった。ここに出る覩貌羅人乾豆波斯達阿は，斉明天皇3年に筑紫に漂着した覩貨邏人の一行の1人である。トクッラの表記が異なるが，

別の人びとではない。乾豆はヒンドゥークすなわちインド人を写した語である。波斯はパールシークすなわちペルシア人を写した語である。インドのムンバイ（ボンベイ）にいる9世紀以前にイラン本国から移住したゾロアスター教徒はパールシー族と呼ばれるが，このパールシークと同系の名である。達阿はダツアと読んで，サンスクリットのデーヴァダッタの後肢ダッタと同じものとする説があるが，これは間違いである。達阿はダルアと読み，ペルシア人名ダーラーを写したものである。墮羅人というのは，ダーラーの一行の意味であろう。ダーラーとはペルシア人の代表的な名前で，ラテン語で表わしたダリウスで広く知られている。

ダーラーはペルシア（イラン）人で，現在のウズベク共和国あたりのトハラ地方に居住していたので覩貨邏人と書かれた。これらの漢字表記は，彼が中国にいたときに中国人から与えられたもので，吐火羅も同じである。インド人・ペルシア人と呼ばれたのには理由があった。イランを中心に広大な地域を領有したササン朝ペルシア（226－651）がアラブ軍によって滅ぼされ，国教であったゾロアスター教はイスラム教にかわり，多くの国民が改宗を拒否して中央アジアを経て中国に亡命した。1部の集団はインドのムンバイに亡命した。乾豆波斯達阿は，中国（の長安）を経て日本に亡命してきた中央アジアのペルシア人であった。

ペルシア人は盂蘭盆と深い関係をもっていた。ウラボンという語は仏教用語なので，サンスクリット起源と考えられてきた。『盂蘭盆経』によると，釈迦の10大弟子の1人で神通第一といわれた目連が，亡母が餓鬼道に落ち倒懸（逆さ吊り）の苦しみを受けているのを見た。目連は悲号啼泣して釈迦にすがった。釈迦は目連にいった。7月15日に7世の父母のために百味の飲食（おんじき），五菜を供えて衆僧を供養し，その力にすがれと。唐初の長安の大慈恩寺の訳経僧玄応は，目連の母の倒懸の故事から，倒懸というのはサンスクリットのウルランバナであると推定した。ウルランバナは，玄応によると逆さ吊りの意であるというが，一切のサンスクリット文献に見られない語で，O.ベートリングの『ペテルスブルク・サンスクリット辞典』にも収録されていない。

ただ本邦の『漢訳対照　梵和大辞典』（荻原雲来都監，講談社，1978年）は，この語を収録している。これは日本の仏教界を考慮してのことである。

盂蘭盆という語は，古代イラン語で「正信の徒らの（祭り）」を表わすアルタワーナームの中世語形アルタワーン／アルタヴァーンの東イン方言ウラヴァーンに由来する。この語が北伝仏教と共に中国に伝えられ，盂蘭盆と漢訳されたのである。したがって，盂蘭盆の語と行事は南伝仏教には見られないのである。トハラ（西北インド）のペルシア人ダーラーはゾロアスター教徒で，ゾロアスター教に起源をもつ正信の徒の魂祭りである盂蘭盆会に飛鳥朝廷によってあらかじめ招聘されていたと考えられる。途中で漂着し，7月15日に間に合うように早馬で飛鳥にやってきたのである。3年あとの7月15日の盂蘭盆会を修したあと，翌16日にダーラーの一行は妻を人質に残して西海の路をたどった。

From Chaos to Order

Eiichi IMOTO

When dry weather continued, the people of the ancient world killed a bull or a horse, cut its neck and threw it into the river. The bull／horse was an incarnation of the water god.

The blood of the killed bull／horse was supposed to stir the dying water god to make the rain fall. This means that a new season had begun. Thus the season in chaos was replaced by a new season.

The king was a symbol of the seasons, linked with the change of weather. He was annually killed and resurrected by the young victim's blood. The victim was an incarnation of the king. When the new king ascended the throne, the first thing for him to do was to make rain, killing a bull or a horse, thus returning the disordered reign to an ordered one.